

2次正方行列の正則性 L01 10/04

2次正方行列 $A \in M_2(\mathbf{R})$ に対して $\exists X \in M_2(\mathbf{R})$ が存在して

$$AX = XA = I_2 \quad (1)$$

が成立するとき A は正則であるといいます. X については一意性, すなわち

$$AX = XA = I_2, \quad AY = YA = I_2 \quad \Rightarrow \quad X = Y \quad (2)$$

が成立して, $X = A^{-1}$ と記して A の逆行列と呼びます.

演習 1 (1) を示しましょう. 行列の積の結合法則 (Associative Law) を用いることを意識してください.

2次正方行列 $A \in M_2(\mathbf{R})$ が正則であることの言い換えはいろいろありますが次の定理 1 が基本です. (3次正方行列に対して同等の定理を理解するのは大事であるが, それは数週間後に復習する予定です.)

定理 1 $A \in M_2(\mathbf{R})$ に対して次の (1), (2), (3) は同値です.

(i) A は正則である.

(ii) $A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0} \Rightarrow \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0}$

(iii) $|A| \neq 0$

定理 1 の証明に入る前に条件 (ii) について言い換えておきます. $A = (\vec{a}_1 \ \vec{a}_2)$ と A を列ベクトル表示すると

$$A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = x\vec{a}_1 + y\vec{a}_2$$

なので

$$(ii) \Leftrightarrow (x\vec{a}_1 + y\vec{a}_2 = \vec{0} \Rightarrow x = y = 0)$$

と言い換えることができます. 従って

$$(ii) \Leftrightarrow (ii)' \quad A = (\vec{a}_1 \ \vec{a}_2) \quad \text{とすると} \quad \vec{a}_1 \nparallel \vec{a}_2$$

であること, すなわち A が正則であることと 2本の列ベクトルが平行でないことと同値であることが分かります.

定理 1 の証明を始めましょう.

(i) \Rightarrow (ii) A が正則であるとします.

$$A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0}$$

のとき, この両辺に A^{-1} を掛けると

$$A^{-1}A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = A^{-1}\vec{0} = \vec{0}$$

となり $A^{-1}A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = I_2 \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$ から $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0}$ すなわち (ii) が従います.

注意 (i) \Rightarrow (ii) の対偶 (contraposition) は

$$\left(\exists \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \neq \vec{0} \text{ が } A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0} \text{ を満たす} \right) \Rightarrow A \text{ は正則でない}$$

となります. ここで

$$\begin{aligned} (\vec{0} \ \vec{a}_2) \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} &= 1 \cdot \vec{0} + 0 \cdot \vec{a}_2 = \vec{0} \\ (\vec{a}_1 \ \vec{0}) \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} &= 0 \cdot \vec{a}_1 + 1 \cdot \vec{0} = \vec{0} \end{aligned}$$

から $(\vec{0} \ \vec{a}_2), (\vec{a}_1 \ \vec{0})$ は正則でないことが分かります. 従って

$$A = (\vec{a}_1 \ \vec{a}_2) \text{が正則} \Rightarrow \vec{a}_1 \neq \vec{0}, \vec{a}_2 \neq \vec{0}$$

であること, すなわち正則である $A \in M_2(\mathbf{R})$ の列ベクトルは $\vec{0}$ となり得ないことが分かります.

(ii) \Rightarrow (iii) $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ と成分表示をすると A の余因子行列 \tilde{A} は

$$\tilde{A} = \begin{pmatrix} d & -b \\ -c & a \end{pmatrix}$$

と定義され

$$A\tilde{A} = \tilde{A}A = |A| \cdot I_2 \tag{3}$$

が成立します.

演習 2 (3) を具体的に計算して示しましょう.

余因子行列のこの性質を用いて (ii) \Rightarrow (iii) の対偶 $NOT(iii) \Rightarrow NOT(ii)$ すなわち

$$|A| = 0 \Rightarrow \left(\exists \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \neq \vec{0} \ A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0} \right)$$

を示します. $|A| = 0$ であるとする

$$A\tilde{A} = 0 \cdot I_2 = O_2$$

従って

$$A \begin{pmatrix} d \\ -c \end{pmatrix} = \vec{0}, \quad A \begin{pmatrix} -b \\ a \end{pmatrix} = \vec{0}$$

が成立します.

$$d \neq 0 \text{ OR } c \neq 0 \Rightarrow \begin{pmatrix} d \\ -c \end{pmatrix} = \vec{0}$$

$$b \neq 0 \text{ OR } a \neq 0 \Rightarrow \begin{pmatrix} -b \\ a \end{pmatrix} = \vec{0}$$

なので

$$a \neq 0 \text{ OR } b \neq 0 \text{ OR } c \neq 0 \text{ OR } d \neq 0 \tag{4}$$

であるとき

$$\exists \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \text{ に対して } \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \neq \vec{0}, \text{ かつ } A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0} \text{ が成立する}$$

ことが分かりました. 条件 (4) を否定した

$$a = b = c = d = 0$$

のときは

$$A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = O_2 \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0}$$

なので $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \neq \vec{0}$ を満たすすべての $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^2$ が $A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0}$ を満たします.

(iii) \Rightarrow (i) $|A| \neq 0$ とします. このとき余因子行列の性質 (3) すなわち

$$A\tilde{A} = \tilde{A}A = |A| \cdot I_2$$

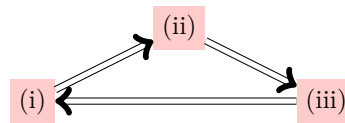
の各辺を $\frac{1}{|A|}$ 倍すると

$$A \left(\frac{1}{|A|} \tilde{A} \right) = \left(\frac{1}{|A|} \tilde{A} \right) A = I_2$$

から A は正則であることが分かります. 正則行列の定義 (1) において $X = \frac{1}{|A|} \cdot \tilde{A}$ とします.

注意 (定理 1 の証明の進行について)

以上で証明したことから、右図を参照すれば条件 (i),(ii),(iii) のいずれからも別の条件を導くことが分かります。従って定理 1 は論理的には証明されました。以下は復習を兼ねて、別の経路で導くことを説明します。



(i) ⇒ (iii) 2 次正方行列 $A \in M_2(\mathbf{R})$ が正則であるとき

$$A \cdot A^{-1} = I_2$$

が成立します。ここで両辺の行列式を考えると

$$|A \cdot \tilde{A}| = |I_2| = 1, \quad |A \cdot \tilde{A}| = |A| \cdot |\tilde{A}|$$

から $|A| \neq 0$ が分かります。

$$A, B \in M_2(\mathbf{R}) \text{ に対して } |AB| = |A| \cdot |B|$$

(iii) ⇒ (ii) $|A| \neq 0$ とします。このとき

$$A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0}$$

とするとクラメールの公式によって

$$x = \frac{1}{|A|} \cdot |\vec{0} \ a_2| = 0, \quad x = \frac{1}{|A|} \cdot |\vec{a}_1 \ \vec{0}| = 0,$$

から $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \vec{0}$ が従います。

注意 残るのは $(ii) \Rightarrow (i)$ を直接証明することですが、これも掃き出し法の一般論から示すことができます。数週間後に 3 次正方行列に対して定理 1 と同等の定理を復習するときに説明します。